日刊工業新聞
年月日 19 01 16 ページ 36 NO.

不撓不屈（ふとうふくつ）

ペンギンシステム ②

取締役に抜てき

1983年に東京・岩本町で創業したペンギンシステム（茨城県つくば市）は、オーダーメードのソフトウエア開発を行っていた。社長の仁衡（にひら）琢磨は、当時6人目の従業員として97年に入社。当時社長の松永明と役員以外の従業員は仁衡を含めてたった4人。そのため松永らとともに、1年目から人工衛星のデータ処理や国際図書館のシステム提案といった大きな仕事も任された。

仁衡はバブル崩壊後の2001年に主任、03年には取締役と、トントン拍子に出世。取締役就任は先輩社員を追い越す形になり、会社のために良いことなのかどうか悩んだ。抜てきの理由を松永に問うと「仁衡君には実力があるからやってほしいんだ」と告げられた。

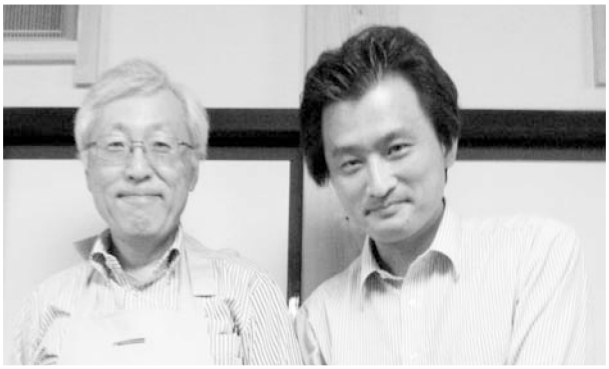
一方で「仁衡君は本来何でもできる人。どこでも通用するから、この会社のための無理はしなくていい」と言い残し、会社を去る先輩らを見送った。

経営難、恩人との別れ

辞意から社長へ

03年からは、松永と仁衡が会社を引っ張っていく。当時は小売業界やアパレルなど、業界を問わず仕事を受けていた。研究分野の顧客もいたため、岩本町から長時間かけてつくばに訪れていた。仁衡は「研究分野こそオーダーメードで一品一様の製品づくりをする自社に、最も適した市場なのでは」と考えるようになる。

その頃、財務状況は危機的状況にあった。バブル崩壊以降、取引先からは単価を半分まで減らされ、資金繰りが悪化した状態が長く続いていた。銀行からの信用は薄れ、融資には役員2人の印鑑が義務付けられた。赤字も2期連続。仁衡は松永を支え続けていたが、ついには疲れ06年、松永に辞意を伝え日本大震災後。取引先である近隣研究所が被災し、売り上げが激減。金融機関からは「高額報酬を削るしかない」と迫られる。対象となる松永について「自分を採用してくれた恩人なのに」と仁衡は悩むが、意を決して松永に告げる。松永は話を受け入れ、退社の意思を表明した。



松永明氏の送別会（左が松永明氏、右が仁衡社長）

会社全体のため構造改革

苦渋の決断

仁衡が社長、松永が会長に就任してから、最も苦渋の決断をしたのは東日本大震災後。取引先である近隣研究所が被災し、売り上げが激減。金がいないとこの会社はつぶれてしまう。いっそ継いでくれ」と言われ、1カ月悩んだ末、妻の反対を押し切って社長を継いだ。

松永の送別会、仁衡の目には涙があふれた。「人前で涙を見せることはめったにない」仁衡。「自分を拾ってくれた恩人を追い出す形になった。数々の苦難を経験したが、これほど耐え難いことはなかった」。松永を見送った仁衡は悲しみを乗り越え、会社全体の構造改革に着手する。

（敬称略）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社